

書誌二題

後藤均平

一、豊後国志考

豊後の国は私の故郷。この国に文化元年（一八〇四）、「豊後国志」という本が出来た。漢文で全九卷八冊。撰者岡藩の医儒唐橋世済は、寛政十二年（一八〇〇）、六十五歳で病没し、遺囑を受けた弟子たちが完成した。完成を藩主に報じた書（漢文）や、彼らが遺した「豊後国志御請書仕立方覚」（和文）を読むと、国郡八鋪を添えて幕府に献上したらしい。一般に諸侯から將軍への献上本は、江戸城内の紅葉山文庫に収められたという。紅葉山文庫の本は、明治六年城内の大火で焼失したものもあるが、残りの大半は現在、内閣文庫でなければ宮内庁書陵部に入っている。しかしその「目録」を見ても、明治六年焼失本目録にも、「豊後国志」は見当らない。また、献上本で紅葉山に入らないものは、昌平坂学問所に蔵されたという。では献上本「豊後国志」はいまどこにあるのか。これが私の課題になった。

こんな場合に、まづ手掛りになるのは岩波の『国書総目録』で、その「豊後国志」の項を引くと、一〇箇所ばかり所蔵先きが記されている。この中に献上本があるやもしれぬ。ではこれを片端から訪ねてみよ

書誌二題（後藤）

う、と志を立てた。立教を定年退職して自由の身になった一九九二年の夏のことである。志は立てたが、私歩行が不自由だから、時間がかかる。所蔵の場処は江都はともかく、関西、四国、九州と散らばっている。いわば昔の貿易船が季節風を待つて乗りだすようなもので、年季がかかる。しかし杖を支えたのは、豊後国志書の敘述の出来栄えが、江戸期の類書にくらべ、群を抜いているからだ。足掛け五年、一九九六年十一月、讃岐志度の多和神社への訪書の旅で、打止めにした。以上の大略は、『汲古』誌二七号に述べてある。

献上本の所在はいまだにわからない。しかしこれでわかったのは、『国書総目録』は、古書を探すにはたしかに便利だが、その記述は不備だ、そのまま信じてはならぬ、ということ。たとえばこの豊後国志の場合、竹田市立図書館、日田咸宜園、多和神社の写本は箸録していない。また国会図書館、東大史料編纂所、京大図書館、龍谷大学図書館等の蔵本記載は不備だ。要するに自分で出かけてこの目でたしかめねばならぬ、近頃安直な複写本だけで済ませられないのが書誌の世界だ、と痛感した。

豊後国志と付き合って、副産物を得た。唐橋君山に「箋積豊後風土記」書がある、これを手がかりに「豊後風土記」を繙いてみると、豊後八郡は、日田から玖珠、直入、大野、海部、大分、速見、国埼の順に記されている。つまり地図で眺めると、時計の逆廻りの郡次記述である。風土記は西暦八世紀の編纂物。して一九世紀の豊後国志の郡次は、国東に始まり、速見、大分、海部、直入、玖珠、日田、そして大野郡で終る。時計廻りである。正保の郷帳の郡次はすでに時計廻りだが、どうしてこんな逆轉順序に変わったのか。念のためにしらべてみたら、常陸、出雲、肥前の現存風土記は豊後同様逆廻りで、播磨風土記だけが

時計廻りだった。この廻り方の演変について考察した書を、小生浅学にして知らない。立教史学会長野田嶺志先生に教えを乞うしだいである。

二、越南本書目

書誌についてこれまで無縁だった私だが、豊後国志の旅を重ねつつ福井保先生（元内閣文庫専門官）から、書簡を通しての御教示をいただくうちに、書誌の尚さを身に沁みた。そこでまた志したのが、付け焼刃、七十の手習ながら、東洋文庫にある越南本の書目作成である。

東洋文庫の閲覧室には、『東洋文庫朝鮮本分類目録附安南本目録』（一九三九年刊）を備え附けている。朝鮮本は前間恭作氏から、安南本（以下越南本と稱ぶ）は永田安吉氏からの寄贈本を元にして編んだ目録書である。

その後朝鮮本、越南本ともに蔵書の数が増えて、戦前作製のこの目録書では不便になった。そこで朝鮮本の方は、田川孝三先生が中心となって、『増補東洋文庫朝鮮本目録』が出た（一九七九年）。まことに慶事ながら、とたんにその増補目録書から、越南本の目録が消えてしまった。越南本も戦後に、多くはマイクロフィルムからの小型版写真本だが、増加している。

立教を退職したとき、河野六郎先生（財団法人東洋文庫理事）が、文庫の研究室に机を一つ与えてくださった。根拠地ができたから、立教の研究室での『大越史記全書を読む会』が、高津茂先生、阿部千恵子君、松下洋巳君らと、細々ながら文庫で続けられている。河野先生の御高配に応えるためにも、東洋文庫

書誌一題（後藤）

蔵越南本目録を作らねばなるまい。先生が私に作れ、と言われたのではない。私の独断作業で、作るからには、豊後国志献上本騒ぎでいささか身に付けた書誌の手法を活かして、「書目」を作ろう、と思いだめた。

月に二、三度、文庫に通って、一九九五年三月に、「越南本書目稿」ができた。およそ二〇〇部有奇。あとは越南国語本（ベトナム語の洋装本）を拾えばいい。この書目が本に為り、書架に納まって、閲覧者の便宜に供するようになるのは、さあいつごろだろう。（一九九七・八・九）

史苑本号は、戴國輝博士の特輯号と聞く。戴さんとは辱交三〇年、謝して惜別の辞を贈る。別れの宴は荻窪の戴さんの広間、一九九六年五月一七日の夕。仄聞、戴さんは身心ともに引締まっておられる由、好哉矣。

星霜三十夢如幻 荻莊花影緑酒宴 洋絃不走老吟熄 惜別窗外滿天寒

（立教大学名誉教授）